幻の至宝、横浜に里帰り

Commemorating the 30th Anniversary of the Yokohama Museum of Art,
the 150th Anniversary of the Collector's Birth and the 80th Anniversary of His Death

横浜美術館開館30周年記念
生誕150年・没後80年記念

原三渓の美術

伝説の大コレクション

The Eye of a Connoisseur:
The Legendary Hara Sankei Collection

PRESS RELEASE

国宝
《孔雀明王像》
7/13→8/7
期間限定出品!

2019 7/13 SAT. → 9/1 SUN.

横浜美術館
YOKOHAMA MUSEUM OF ART

横浜美術館30周年

国宝《孔雀明王像》(部分)　平安時代後期(12世紀)
東京国立博物館蔵　Image:TNM Image Archives

三溪園内苑完成記念の茶会・大師会当日の三溪、大正12(1923)年4月、提供:三溪園

驚異の目利き。原三溪を知っているか?

原三溪(はらさんけい)(富太郎、慶応4／明治元年から昭和14年)は、横浜において生糸貿易や製糸業などで財をなした実業家です。明治初年に生まれ、昭和戦前期にいたる近代日本の黎明・発展期に経済界を牽引しました。

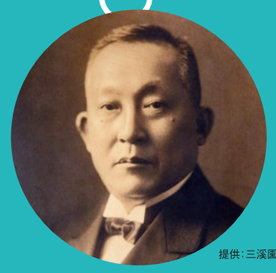
一方で三溪は、独自の歴史観にもとづき古美術品を精力的に収集したコレクターであり、自由闊達(かったつ)な茶の境地を拓いた数寄者、古建築を移築して三溪園を作庭・無料公開して自らも書画・漢詩をよくしたアーティスト、そして、同時代の有望な美術家を積極的に支援し育んだパトロンでもありました。三溪のこうした文化的な営みは、財界人としての活動や人的交流、社会貢献活動家(フィランソロピスト)としての無私の精神にもとづきつつ、近代日本における美術界・美術市場の確立の過程と軌を一にしながら展開したと言えるでしょう。

本展は、原三溪の四つの側面、すなわち「コレクター」「茶人」「パトロン」「アーティスト」としての業績に焦点を当てます。それらの相互関連を時代背景も視野に入れて探りながら、今日、国宝や重要文化財に指定される名品25件以上を含む三溪旧蔵の美術品や茶道具約150件と、関連資料を展観することによって、原三溪の文化人としての全体像を描きだします。三溪自身も一堂に観ることが適わなかった旧蔵の名品を、過去最大規模で展観する貴重な機会となります。

※一部、展示期間が限定される作品がございます。

原三溪年譜

慶応4／明治元(1868)	0歳	岐阜県厚見郡佐波村(現岐阜市柳津町)に、庄屋青木久衛と琴の長男として生まれる。母方の祖父は南画家・高橋杏村。幼少から書画や漢学、詩文を学ぶ。
明治18(1885)	17歳	上京し東京専門学校(現早稲田大学)に入学。政治と法律を学ぶ。
明治24(1891)	23歳	生糸業で財を成した横浜の実業家・原善三郎の孫娘・やすと結婚する。
明治26(1895)	25歳	美術品の購入を開始し、買入覚の記録を始める。
明治32(1899)	31歳	原善三郎の死去にともない家業・原商店を継ぐ。この頃から岡倉天心と交流が始まる。
明治33(1900)	32歳	原商店を原合名会社に改組。生糸問屋業のほか輸出業を開始し、モスクワ、リヨン、ニューヨークに事業を展開。
明治35(1902)	34歳	三井家所管の富岡製糸場などを譲り受け、製糸業にも進出。事業経営を軌道に乗せる。本牧三之谷の広大な敷地に原家本邸を建て居住。敷地(のちの三溪園)に古建築の移築を始める。この頃から三溪と号す。
明治36(1903)	35歳	《孔雀明王像》を井上馨から1万円の高額で購入。以降、古書画の収集に熱が入る。
明治39(1906)	38歳	三溪園を開園し、市民に無料で開放する。和英で看板が掲げられた。
明治44(1911)	43歳	岡倉天心を通じて安田靫彦・前田青邨・小林古径・今村紫紅らの援助を始める。
明治45(1912)	44歳	この頃から日本美術院の若手作家を自邸に招き、古美術鑑賞会を開く。以降、下村観山、前田青邨、横山大観らが三溪園内の原邸にて滞在制作を行うほか、速水御舟、小茂田青樹、牛田雞村らの制作支援を行う。
大正5(1916)	48歳	インドの詩聖タゴールが三溪園を訪れ、2ヶ月間滞在する。滞在中に詩「さまよえる鳥」を作る。
大正6(1917)	49歳	三溪園内苑に茶室・蓮華院を建造し、三溪の茶会記による初めての茶会が催される。
大正11(1922)	54歳	益田鈍翁より箱根の別荘白雲洞を譲りうける。
大正12(1925)	55歳	三溪園の内苑完成を記念して大師会茶会を開催。益田鈍翁、根津青山、服部莱々堂、仰木魯堂、森川如春庵らが席主を務める。関東大震災の後、横浜市復興会長として復興事業に専念。美術品収集や作家支援を自粛する。
昭和5(1930)	62歳	自作書画を掲載した『三溪画集』第一輯の出版。
昭和11(1936)	68歳	矢代幸雄を中心に原三溪所有の美術品を中心とする横浜の美術館建設運動が起こる。
昭和12(1937)	69歳	長男・善一郎没。追善の茶会を開き、和辻哲郎、谷川徹三らを招く。
昭和13(1938)	70歳	書画を本道としない古人による作品を所蔵作品から自選した図録『余技』出版。
昭和14(1939)		腸疾患が再発し8月16日に死去(享年70)。



提供:三溪園

原 三溪[本名:富太郎]

慶応4(1868)ー昭和14(1939)

岐阜の庄屋の長男として生を受け、横浜の豪商・原家に入籍。卓越した経営手腕により、養家を横浜第一の財閥へと発展させる側ら、古美術の重要作を精力的に収集。茶に親しむと同時に、若手作家への物心両面での支援を通じて、近代日本美術の発展を支えたパトロンとしても重要な役割を果たした。自らも書画をよくしたアーティストでもあった三溪の創作の精神は、自邸に古建築を移築した三溪園の造園に結実する。三溪園を市民に無料で開放し、また関東大震災後は私財を投じ横浜の復興に尽すなど、社会貢献の精神をいち早く実践。実業、文化の両面で、近代日本の発展に大きな影響を及ぼした。

展覧会みどころ

1 驚くべき大コレクション。その真髄を、過去最大規模で紹介!

三溪が生涯に購入した美術品は、優に5,000点を超えます。コレクションは没後に分散しますが、国内各地の美術館や博物館を代表する所蔵品となり、また個人などに受け継がれています。本展では三溪の旧蔵品約150件を展示。三溪の旧蔵品がこの規模で一堂に紹介されるのは初めて。三溪自身もこれらをいちどきに鑑賞したことはないのです。本展は、三溪がコレクションの公開のために建設を夢見ていたとされる、幻の美術館を具現するものとも言えるでしょう。

2 国指定文化財(国宝、重要文化財)25件以上を含む、珠玉の美術品が集結!

三溪が収集した美術品のうち現存する作品の多くは、今日では国宝や重要文化財に指定され、三溪の審美眼の確かさを物語っています。本展では、三溪旧蔵品を代表する国宝《孔雀明王像》や国宝《寝覚物語絵巻》を始め、25件以上の国指定文化財が出品されます。三溪旧蔵の至宝が、最大規模で横浜に里帰りします。

3 「コレクター」「茶人」「パトロン」「アーティスト」——四つの切り口で、三溪と芸術との関わりを紐解く。

三溪は茶道具の収集も行い、実業界の先輩で茶人としても知られた益田鈍翁(ますだどんのう)や高橋箒庵(たかはしそうあん)を招き、慣例にとらわれない道具の取り合わせなどで自由な趣向の茶事を楽しみました。書画の才能は余技の域を超え、その恬淡とした画境は三溪ならではのものです。また、今日、国の名勝にも指定される「三溪園」は三溪の最大かつ最高の芸術作品に他なりません。そして実業以外の三溪の功績で最も広く知られるのが、日本美術院の画家を支援したパトロンとしての役割でしょう。本展では、「コレクター」「茶人」「パトロン」「アーティスト」の四つの切り口で、文化人・三溪の全体像を紹介します。

4 三溪自筆のさまざまな記録を読み解き、コレクションの秘密に迫る。

三溪は、作品の購入先や金額を自ら克明に記録した買入覚や数種の蔵品目録を残しました。これらからは、コレクションの形成の過程や傾向、分類に関する三溪の独創的な考え方を知ることができます。また、三溪は生前、古代から近世の所蔵品名品集『三溪帖』の出版を計画しました。そこに掲載される予定であった緒言や解説の自筆草稿において、三溪は研究者の態度で所蔵品を分析し、独自の視点で美術史上の位置づけを行っています。本展ではこれらを含む貴重な記録類から、コレクションの遍歴を辿り、また、三溪の美術史観を読み解きます。

コレクター三溪

5,000点を超える作品を集めた驚異の目利き

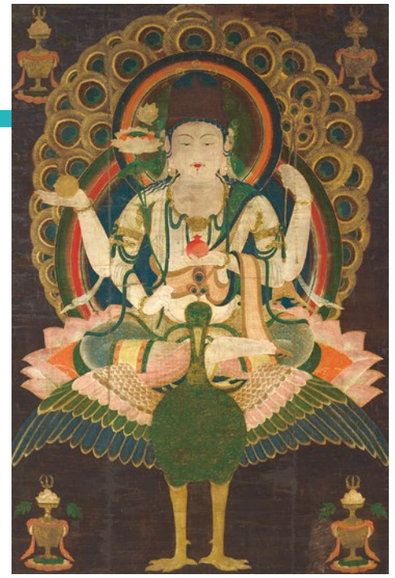
三溪が収集した美術品の多くは、自筆の蔵品目録などの資料群によって解明されつつあります。なかでも三溪が記録した美術品や古器物、古建築の買入覚は、煎茶器に始まり仏画そして茶の湯の道具や関連する美術品を鋭い鑑識眼でコレクションを拡大させていく過程を跡づける貴重な資料と言えます。原家に入籍して間もない明治26年から、晩年の昭和4年までの美術品の売買実績が全5冊に記録されており、関東大震災が発生した大正12年を境に収集活動を自粛したことがわかります。

三溪は、自らの収集活動を総括するために、巨費を投じて豪華な所蔵名品選『三溪帖』の刊行頒布を企てましたが、出版を目前にして関東大震災で焼失し未刊に終わりました。この『三溪帖』の草稿では、コレクションから精選した作品を概ね「日本絵画：古代から近世初期」「日本絵画：近世」「中国絵画彫刻、日本彫刻」「日本墨蹟、中国墨跡、建築、器物」に分類し、通史的に俯瞰しようと試みています。

この章では、『三溪帖』に掲載予定であった作品、すなわち三溪の比類ない審美眼を端的に示す名品中の名品から厳選した作品を中心に、奈良時代から江戸時代にいたる日本と中国の書画を体系的に紹介します。

国宝

《孔雀明王像》
平安時代後期（12世紀）、絹本着色・一幅、147.9×98.9cm
東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives
［展示期間：7月13日～8月7日］

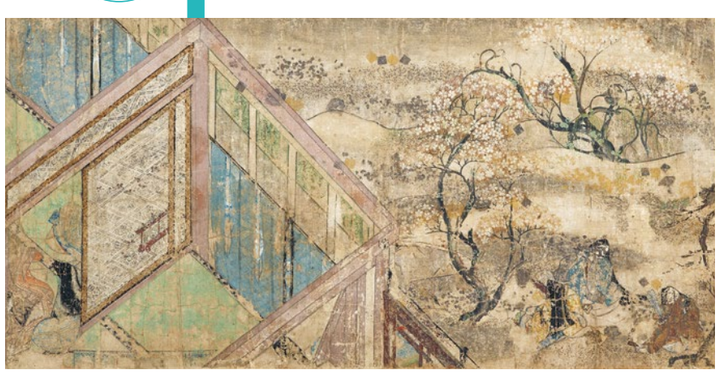


買入覚の記載によれば、三溪はこの作品を明治36年に購入している。所有者の前蔵相・井上馨から当時としては破格の1万円で購入したという挿話が、当時35歳で古美術収集家としては新参であった三溪の名を斯界に知らしめた。事実、この作品の購入記録に附記して「入金一万三千円也　大坂ニテ諸道具売却代」とあり、購入資金を工面したとおぼしい事情がうかがえる。

孔雀明王は、毒蛇を食べその毒を甘露としてしまう孔雀を神格化した尊格で、さまざまな病気平癒、息災、請雨止雨などに効果があるとしてひろく信仰された。この作品は、通形の四臂像として描かれた孔雀明王像の代表的な作例のひとつで、三溪は『三溪帖』解説草稿において、藤原中期の代表品と評価している。

国宝

《寝覚物語絵巻》（部分）
平安時代後期（12世紀）、紙本着色・一巻
26.0×533.0cm、大和文華館蔵
［展示期間：8月9日～9月1日］



11世紀中頃から末までの間に成立をみたとされる物語『夜の寝覚』を絵巻にしたもので、詞五段・絵四段からなる。平安王朝末期の繊細で優美な美意識を伝える名品として名高い。本巻は、その末尾部分の残欠である。

買入覚によれば、三溪はこの作品を、伝狩野元信《奔湍図》（大和文華館蔵）などとともに、外交官であった秋元興朝子爵から大正5年に直接購入している。琳派の美術史的価値をいち早く認め、その作品を愛好し収集した三溪は、『三溪帖』解説草稿において、この古大和絵の名作から琳派の創作者が何らかの刺激を受けていたのではないかという独自の推論を述べている。

重要文化財

伝毛益《蜀葵遊猫図》
中国・南宋時代（12世紀）、絹本着色・一幅
25.3×25.8cm、大和文華館蔵
［展示期間：7月13日～8月7日］

重要文化財

伝毛益《萱草遊狗図》
中国・南宋時代（12世紀）、絹本着色・一幅
25.3×25.7cm、大和文華館蔵
［展示期間：8月9日～9月1日］

南宋の乾道年間（1165-73）を活動期とする宮廷画家・毛益作と伝承される吉祥画で、買入覚によれば、大正8年に京都の鳩居堂から7万円で《蜀葵遊猫図》《萱草遊狗図》を双幅として購入している。このとき、最澄筆《尺牘（久隔帖）》（国宝、奈良国立博物館蔵）なども、ともに購入しており、三溪の古美術収集最盛期の一品と考えてよい。

《萱草遊狗図》では、親犬のもとで憩う子犬4匹がいきいきと描かれ南宋画の優れた写実性がみてとれる。一方、《蜀葵遊猫図》では、蝶が飛ぶ初夏、立葵のもとで母猫の側で子猫が戯れる長閑な情景が描かれる。猫が「耄」、蝶が「鼕」の音に通じ、ともに老人の字義であることから長寿を象徴する。『三溪帖』解説草稿において三溪は、毛益筆と古来伝承される作品のなかで「優秀ナルモノ」と評価している。

三溪の夢を受け継いだ、大和文華館初代館長・矢代幸雄

コレクター三溪の功績を後世に伝えた人に、美術史家・美術評論家の矢代幸雄がいます。三溪は、権威ある研究者よりもむしろ若い学者と親しく交際することを好みましたが、その代表的な人物が矢代でした。矢代は若き日に、三溪のもとに集まった若い日本画家や学生から成る「三溪グループ」の一員として三溪の薫陶を受けました。名品を前に仲間と激論を交わした日々をのちに回想し、「三溪園の仲間として、珍しく学者として三溪先生によって育てられたことを、一生涯の幸福と感じている。」と記しています。昭和21年に近畿日本鉄道から大和文華館をつくる計画を一任され、のち初代館長となった矢代は、三溪が抱いた美術館づくりの夢を受け継ぐ志で、原家から三溪遺愛の名品14点を譲り受けてコレクションの中核としました（本展ではうち9点が特別出品）。また、同館の研究誌『大和文華』に、「三溪先生の古美術手記」と題して『三溪帖』の草稿を註釈を加えて翻刻し、三溪を直接知る者として、その人物像と歴史観をいち早く紹介しました。

重要文化財

伝雪舟等楊
《四季山水図巻》（部分）
室町時代（15世紀後半）、紙本墨画淡彩・一巻
21.5×1151.5cm
京都国立博物館蔵
※会期中、巻替えあり

『三溪帖』解説草稿には、毛利家伝来の雪舟《山水長巻》（国宝、毛利博物館蔵）と並称される名品であり、「雪舟遺作中ノ優秀ナルモノ也」という評価が述べられている。また旧新発田藩主であった溝口家から、京都の鳩居堂を介して入手した経緯が摘記されている。買入覚によれば、明治36年に大燈国師の墨跡などとともに5千5百円で一括購入したことがわかる。『三溪帖』の草稿を翻刻解説した矢代幸雄によれば、当時、専門家から雪舟真筆について疑問が呈せられ、三溪はそれを慨嘆したというが、終生この作品を愛玩し、死去の前々日にこの巻子を枕頭に披いて生涯最期の鑑賞としたという逸話が残されている。

コレクター三溪

重要文化財

伝本阿弥光悦
《沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒》
江戸時代初期（17世紀）、木製漆塗・一本、長39.6・径3.3cm
大和文華館蔵　［展示期間：8月9日～9月1日］

細かな金粉を敷きつめた沃懸地のうえに、金貝と高蒔絵、青貝の螺鈿、鉄板で合計25頭もの鹿がたくみに描写されている。鹿は秋を代表する典型的主題として古来和歌にも詠まれてきた。そのような文学的な情趣とともに、「鹿」の訓みが「禄」に通じるため吉祥図としても好まれ「群鹿図」などとして描かれた。また、鹿が哀感に満ちたその鳴き声を連想させることから、とりわけ管楽器笛筒の意匠に相応しいと考えられたのかも知れない。

矢代幸雄は原三溪逝去の追悼文に「三溪先生自身も光悦とは深く黙会するところあり、従って光悦派の芸術には最も造詣深くまた名品も集められた」と書いている。

尾形光琳《伊勢物語図　武蔵野・河内越》
江戸時代（18世紀）、紙本着色・双幅、各118.0×49.2cm、MOA美術館蔵

買入覚によれば、三溪は、大正2年にこの作品を、尾形乾山《武蔵野隅田川図乱箱》（重要文化財、大和文華館蔵）とともに3万1千円で購入したと思われる。右幅に「伊勢物語」の第25段筒井筒後半の挿話・河内越の場面が、左幅に同第12段武蔵野の場面が、流麗な筆致と明快な色彩で描かれる。

矢代幸雄によれば、三溪は本阿弥光悦に深く傾倒しており、宗達、光琳、乾山にいたる、いわゆる琳派を近世のもっとも日本らしい芸術流派といち早く評価し、収集につとめた。この作品が収集されたころ、日本美術院の若い画家が頻繁に三溪園に参集して三溪の収集品を鑑賞しており、琳派の作品群も主題と描法の両面で若い画家を大いに感化したと推測される。

茶人三溪

自由闊達な茶の愉しみ

三溪は煎茶に関わる道具を当初から収集していましたが、大正時代に入ると、益田鈍翁や高橋箒庵らの数寄者との交流を通じ、本格的に茶の湯の世界に入っていきました。自ら構想した茶室「蓮華院」の完成を記念して初の茶事を催したのは大正6年、49歳の時です。三溪の買入覚からは、この頃から茶道具の収集が熱を帯びる様子や、のちに大規模な収集活動を控えた後にも茶道具の購入は続いたことがわかります。

三溪は、この初陣茶会から、亡くなる直前の昭和14年4月の最後の茶会までの会記を綴った『一槌庵茶会記』を残しています。三溪の茶は侘び茶の中でも「大侘び」だったと言われ、また茶の湯に仏教美術を取り入れる趣向は三溪の前にはみられません。この茶会記からは、三溪の道具の取り合わせを知ることができ、また、三溪が伝統的な作法に拠らずに自由闊達な趣向で懐石や茶を楽しんでいたことがうかがえます。この章では、三溪愛用の茶道具を、茶会記や茶会にまつわる逸話などを参照しながら紹介します。

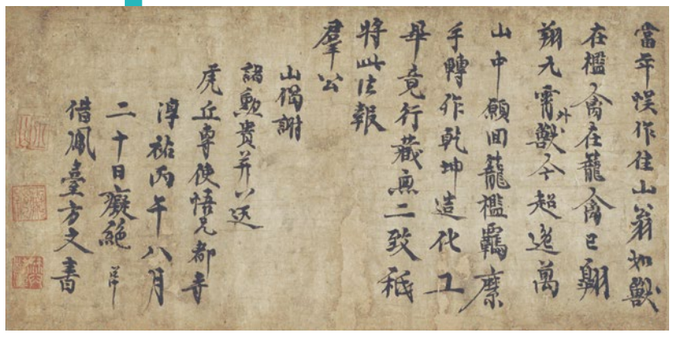
《伎楽面（迦楼羅）》
奈良時代（8世紀）、木造（桐）彩色・一面、高39.1・幅21.2・奥行27.3cm、MIHO MUSEUM蔵　撮影：畠山 崇

伎楽とは飛鳥時代に大陸から日本に到来した仮面舞踊劇で、正倉院宝物を始めとする面のみが今日に残る。迦楼羅は鳥を神格化したもので、インド神話のガルダを前身とする仏教の守護神。三溪の買入覚によれば、明治36年に古美術商・今村甚吉から天平時代の器物や仏具など一式を2千円で購入しており、内訳に「天平伎楽面」の記載がある。同じ年に他にも「伎楽面」購入の記録があり、大正9年にも購入している。

三溪は、大正12年に三溪園内苑完成を記念して開催された大師会で、一席を「古美術展観室」として伎楽面10面を披露。600名と言われる来会者はその迫力にさぞ圧倒されたことだろう。また、三溪が伎楽面を主役にした茶事に益田鈍翁を招こうとした矢先、鈍翁が山姥の面を床飾りにした茶会に三溪を招いたため、三溪が茶友との「面対決」を避けて計画を中止した逸話も残る。

重要文化財

癡絶道冲《偈頌》
中国・南宋時代・淳祐6（1246）年、紙本墨書・一幅、27.3×55.5cm
五島美術館蔵　※会期中、展示替えあり



癡絶道冲は、無準師範と並んで南宋禅林の巨匠と称された僧。偈頌とは仏教の教えを韻文の形式で述べたもので、本作は、虎丘山の雲嶽寺から住持となることを請いに来た使者に断りを伝える内容。

三溪は、大正8年に池田侯爵家の売立に出た本作を、「東都茶器商中に其人あり」と知られた古美術商・梅澤鶴叟を介し、1千9百円で購入している。この年の買入覚には、10万円で購入した最澄筆《尺牘（久隔帖）》（国宝、奈良国立博物館蔵）を始め、三溪が茶席で愛用した古筆や墨跡の名品が多く含まれ、年間購入総額は50万円を超える最高額に達している。

《志野茶碗　銘 梅が香》
桃山時代（16世紀末～17世紀初期）、陶器・一口
高8.3・口径13.5・底径3.8cm、五島美術館蔵
撮影：名鏡勝朗　［展示期間：7月13日～ 8月7日］

ほのかな赤みを帯びた釉色が美しく、太い轆轤目が豪快な無地志野の茶碗。江戸後期の大名茶人・松平不昧の旧蔵品で、不昧の蔵品目録である『雲州蔵帳』に記載がある。三溪は大正12年、おそらく震災の前に、不昧旧蔵品を多数入手しており、本作は2千円で購入している。

翌15年5月に三溪園内の茶室・金毛窟で行われた、益田鈍翁を主客とする震災後初の茶会でこの茶碗を使用している。その後も晩年まで頻繁に茶会記に登場し、愛用していたことがうかがえる。

パトロン 三溪

敬意と慈愛に満ちた支援

古美術や茶道具の収集家として名を馳せた三溪は、同時代の美術家を支援したパトロンでもありました。横浜出身の美術史家・岡倉天心（本名：覚三）を通じて明治32年に日本美術院の名誉賛助会員となった三溪は、その後、同院の美術家を中心に支援を始めます。その内容は、生活費や研究費の支給、作品の購入といった直接的なものに留まらず、豊富な古美術の収集品を実見する場を美術家に与え、夜を徹して共に議論するといった教育的支援にも及びました。三溪から援助を受けた美術家たちは、金銭の憂慮なく制作に注力できる環境が整っただけでなく、古都や海外への研究旅行、あるいは三溪園や三溪の別邸から得た着想、そして三溪所蔵の名品に養われた見識によって数々の名作を生み出しました。

三溪は大正12年の関東大震災を境にパトロンとしての活動も自粛しますが、同時代の美術家との交流は晩年まで続き、彼らの間接的な支えとなりました。三溪はまさしく、近代日本美術形成の重要な一端を担った人物と言えます。

横山大観《游刃有余地》

大正3（1914）年、絹本着色・双幅、各187.8×86.3cm
東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives
※会期中、展示替えあり

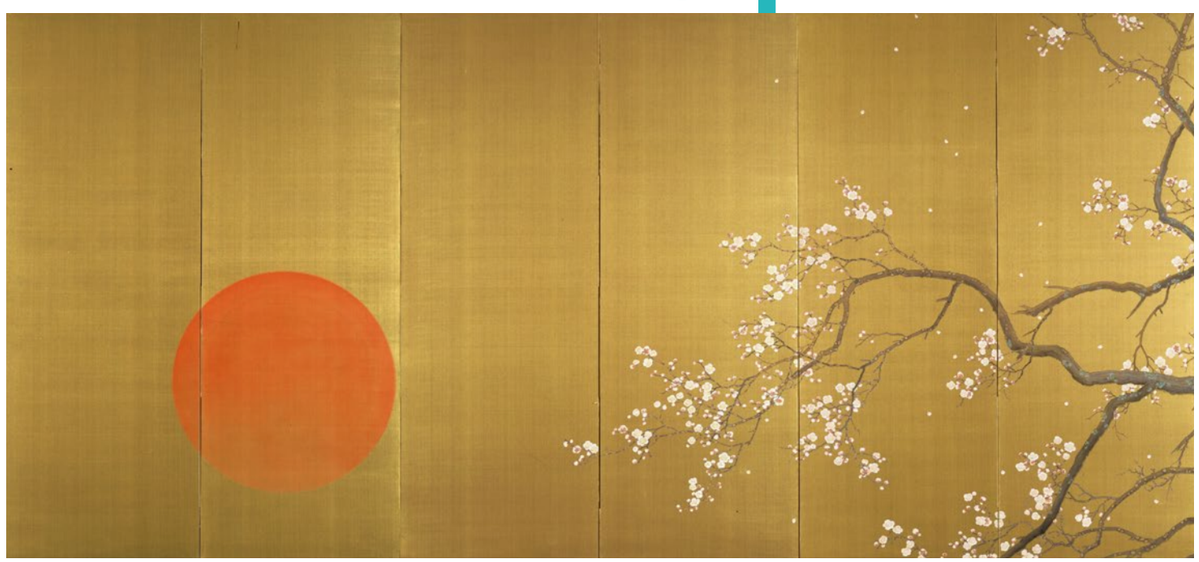
横山大観は、三溪の買入覚や蔵品目録にその名がもっとも多く認められる近代の美術家。本作の主題は『荘子』の「養生主篇」による。魏の恵王が、刀使いの名人・庖丁の牛をさばく技をほめたところ、庖丁は技ではなく道だと返した。舞のように鮮やかな刀さばきは、心眼で対象に向き合い、自然の摂理に従うことで生み出されると聞いた恵王は、養生、すなわち生を全うする道を悟ったという故事である。

三溪の所感が書き込まれた日本美術院再興第1回展覧会の図録には、「大観の作品多しと雖今日迄第一の作品たるを何人も異議なく候」とあり、自身の宝庫に加わるべき作品として高く評価している。

重要文化財

下村観山《弱法師》

大正4（1915）年、絹本金地着色・六曲一双、各186.4×406.0cm
東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives
［展示期間：8月9日～9月1日］



安田靫彦《夢殿》

大正元（1912）年、絹本着色・一幅、113.6×224.5cm
東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives
※会期中、展示替えあり

経典の解釈書を著す際、夢殿にこもって夢見したとされる聖徳太子の伝説を描いた、安田靫彦初期の代表作である。生来病弱であった靫彦は、明治41年の奈良滞在中に著しく体調を崩し、一時制作を中断せざるを得ない状態に陥った。ようやく回復に向かい、制作を再開した直後の明治44年末、靫彦は岡倉天心からの手紙で、向後2年にわたる三溪からの支援が決定したことを知る。

本作は、三溪から研究費を得た靫彦が着手した、それまでの画業における最大規模の作品であり、第6回文部省美術展覧会において最高賞の二等賞二席を受賞した。三溪の買入覚に本作がみられることは、三溪が自ら嘱望した画家の研鑽に、作品購入をもって報いたことを意味している。

深山の中に立つ尼僧を幻想的に描いた本作は、その前衛的な表現が受け入れられず第6回文部省美術展覧会には落選する。しかし、第15回巽画会において三等銅賞一席を得た際、本作が三溪の目にとまったことがきっかけとなり、のちに日本美術院第三世代の代表的美術家となる牛田雞村、速水御舟、小茂田青樹への本格的な支援が始まったと言われる。

執拗なまでの写実主義を日本画に取り入れた大正時代の御舟の代表作《京の舞妓》（東京国立博物館蔵）も三溪の旧蔵品であったことから、三溪は御舟の革新的な試みに期待を寄せていたことがうかがえる。三溪のみならず、長男・善一郎の近代西洋絵画コレクションを実見するなど、御舟は原家の当主と二世代にわたって親しく交際した。

速水御舟《萌芽》

大正元（1912）年、絹本着色・一幅、201.5×84.8cm
東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives
※会期中、展示替えあり

下村観山は、三溪がもっとも寵愛した近代の美術家といって差し支えない。作品の購入はもとより、横浜本牧の所有地を提供して住まわせるなど、制作に没頭できる環境を十分に整えた。謡曲『弱法師』を主題とする本作は、偽りの告げ口により父に捨てられ、盲目となって諸国を放浪していた俊徳丸が、西方浄土に沈む太陽を拝し、極楽浄土を観想する場面を描く。大きく枝を広げた梅樹は、三溪園の臥龍梅をモデルに描かれたものと言われる。大正4年の日本美術院再興第2回展覧会に出品された当時から傑作の呼び声高い、観山の絶頂期を示す作品である。のちに三溪園に逗留したインドの詩人・タゴールが本作を絶賛し所望したが、三溪は決して手放すことはなかった。

アーティスト三溪

余技の域を超えた書画、理想美としての庭園

三溪は、自らも書画をよくしたアーティストとしても知られています。故郷岐阜の豊かな自然、そして幼少より意欲的に学んだ書画や漢学、詩文の素養が、その類稀なる感性を育んだといえるでしょう。母方の祖父は南画家・高橋杏村（きょうそん）。その長男で叔父の高橋杭水（こうすい）らに、三溪は絵画や詩文を学んだとされます。関東大震災後、横浜の復興に専念した三溪は、美術品の購入や作家への支援を自粛しますが、自ら書画を多く制作するようになります。それらの作品は、前田青邨ら画家たちに絶賛されました。

一方で、三溪の創作の精神は、本牧三之谷の広大な土地に日本庭園を設計、そこに古建築を移築し完成させた三溪園に結実します。私邸を含むこの庭園は、自らの創造の源となるのみならず、作家支援の現場となり、万人に無料で開放されました。そこには、文化の「公益性」に対する強い信念に貫かれた、三溪独自の世界観をみることができるでしょう。

開園間もない頃の三溪園入口

明治39（1906）年　提供：三溪園
自由観覧の旨、和英で看板が掲げられた。

原三溪《鵜飼と金華山》

昭和初期、絹本淡彩・一幅、132.2×32.5 cm
岐阜市歴史博物館蔵

故郷長良川の風情のひとつである鵜飼を、金華山にそびえる岐阜城の天守とともに描いた作品。鵜飼は近世以来たびたび描かれてきた画題で、祖父・高橋杏村の作品にもみることができ、三溪自身も複数の作品を残している。

本作では、帰省の際に、友人と酒を交わして過ごした時間の愉しさが、漢詩に詠まれ、画とあいまって故郷への望郷の念が表現されている。

原三溪《白蓮》

昭和6（1931）年、絹本淡彩・一幅
128.0×41.6 cm

蓮は、三溪が最も多く描いた画題。故郷岐阜で生産が盛んであることから、蓮は沼池の風景のみならず茶席に供する食材としても、三溪にとって親しみのある主題だった。三溪の描いた蓮はそのほとんどが白蓮で、輪郭線を用いずモチーフの形態を直接彩色する没骨の技法で描かれている。

本作は昭和6年に小林古径に贈られた作品。その清廉で穏やかな佇まいから、古径は表具を仏画仕立てにし、三溪に箱書きを依頼した。

三溪園の夏の風景
提供：三溪園

三溪園へのいざない

三溪園（横浜市中区本牧三之谷）は昭和20年の空襲で被害を受けましたが、昭和28年に三溪園保勝会の管理となり、庭園の再整備を行い、今日に至っています。約175,000㎡の庭園には、三溪が京都や鎌倉などから移築した古建築や、三溪の構想による茶室などの歴史的建造物が配され、四季の自然との見事な調和を見せています。かつて三溪は、「三溪の土地は勿論余の所有たるに相違なきも、其の明媚なる自然の風景は別に造物主の領域に属し、余の私有には非ざる也…」と語りました。人々と共に美しい景観を楽しむことを願った三溪の心は、今も三溪園に息づいています。三溪の美意識の結晶である三溪園を、ぜひ本展と合わせてお訪ねください。

三溪園との相互割引プラン ※他の割引との併用不可。

7月13日（土）から9月1日（日）の間、三溪園との相互割引を実施！

「原三溪の美術」展のチケット提示で三溪園の入園料が100円割引、
また三溪園の入園チケット提示で「原三溪の美術」展の当日観覧料が300円割引となります。

三溪園イベント情報

「原三溪没後80周年記念企画
三溪園×横浜美術大学　三溪園と日本画の作家たち」

2019年7月12日（金）～8月18日（日）9:00～17:00　三溪記念館、鶴翔閣（三溪園内）

原三溪は横山大観など当時新進の画家をはじめ、多くの作家たちを支援しました。
本企画では、この事績にちなみ、園内の2会場で新旧の作家による作品を紹介します。
※鶴翔閣の会場は8月3日（土）からとなります。

お問合せ　三溪園　TEL: 045-621-0634・5　https://www.sankeien.or.jp/

三溪が大正6年に益田鈍翁らを招き、初めての茶会を催した蓮華院
提供：三溪園

戦前の三溪園大池沿いの園路
提供：三溪園

市民からみた三溪とは？

原三溪市民研究会との連携事業

原三溪市民研究会　http://www.harasankei-kenkyukai.com/

原三溪市民研究会は、平成19年に横浜市芸術文化振興財団と三溪園保勝会の呼びかけで発足。農学博士の藤本實也が稿本を残した『原三溪翁伝』を読み解き、出版することを目的に、近代経済史を専門とする内海孝氏を代表に、横浜美術館と三溪園の学芸員と共に市民25名の参加者が集まりました。平成21年に900ページに及ぶ大著が完成。その後は市民主体の組織に再編成され、「三溪を学ぶ、三溪に学ぶ」の姿勢で月例会やスタディツアーを行っています。研究の成果をホームページや会報、冊子、シンポジウムで発表し、広報啓蒙に努めています。

「もっと知ろう！原三溪 ―原三溪市民研究会10年の足跡―」

8月3日（土）から9月1日（日）　横浜美術館アートギャラリー1 にて
実業家、文化人としての両面から、三溪の全体像に迫るパネル展示や、関連イベントを行います。

横浜美術館開館30周年記念
生誕150年・没後80年記念

原三溪の美術 伝説の大コレクション

Commemorating the 30th Anniversary of the Yokohama Museum of Art,
the 150th Anniversary of the Collector's Birth and the 80th Anniversary of His Death

The Eye of a Connoisseur: The Legendary Hara Sankei Collection

会期　2019年7月13日(土)～9月1日(日)

会場　横浜美術館

開館時間　10:00～18:00 ※入館は17:30まで

毎週金曜・土曜は20:00まで開館 ※入館は19:30まで

休館日　木曜日

主催　横浜美術館、日本経済新聞社

特別協力　公益財団法人三溪園保勝会、大和文華館、原三溪市民研究会

協力　みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

お問合せ　TEL: 045-221-0300（横浜美術館）

展覧会公式サイト　https://harasankei2019.exhn.jp/

※一部、展示期間が限定される作品がございます。

◎観覧料(税込)

一般　1,600（1,400／1,500）円

大学・高校生　1,200（1,000／1,100）円

中学生　600（400／500）円

早割ペア券　2枚1セット2,200円　※販売期間:2019年4月8日(月)～5月12日(日)　※お1人で2枚の使用も可

※小学生以下無料
※65歳以上の当日料金は1,500円(要証明書、美術館券売所でのみ販売)
※(　)内は前売／有料20名以上の団体料金(要事前予約、美術館券売所でのみ販売)
※毎週土曜日は高校生以下無料(要生徒手帳、学生証)
※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方(1名)は無料
※観覧当日に限り企画展の観覧券で「横浜美術館コレクション展」も観覧可
※その他の割引料金については別途お問合せください。
※前売券販売期間:2019年5月13日(月)～7月12日(金)

◎チケット取扱い
横浜美術館(前売りはミュージアムショップ)
展覧会公式サイト
チケットぴあ、ローソンチケット、セブンチケット、イープラスほか主要プレイガイド

プレスリリースお問合せ　横浜美術館 広報担当(水谷、藤井、一色、梅澤)
TEL: 045-221-0319　FAX: 045-221-0317　E-mail: pr-yma@yaf.or.jp

横浜美術館
YOKOHAMA MUSEUM OF ART

〒220-0012　横浜市西区みなとみらい3-4-1　TEL: 045-221-0300　FAX: 045-221-0317
[アクセス] みなとみらい線(東急東横線直通)「みなとみらい」駅3番出口から徒歩3分／
JR、横浜市営地下鉄「桜木町」駅から「動く歩道」を利用、徒歩10分